長崎市「青少年ピースボランティア」 参加者の感想

【1.北九州市（平和のまちミュージアム）に行って学んだこと・感想】

●福岡・北九州の戦争の被害について、初めて学んだ。紅葉が美しく穏やかな街並みが、戦前から造兵廠の誘致に伴い発展し、77 年前には米軍の空襲の標的となり、数多くの尊い命が失われたとは信じられなかった。甚大な被害を受けており、絶対に風化させてはいけないと思った。造兵廠がもたらした豊かさと、その反面の戦時下での苦しみの 2 つの側面を学ぶだけでなく、北九州の方が長崎原爆に関してどのように捉えているのかも理解することができた。県外の方々が長崎に対してどのような思いを持っていたかなどを聞くことができ、すごく良い経験になった。
●ミュージアム内で特に印象に残ったのは、小倉に原爆が落とされていた場合の被害予想図だ。北九州の人にとっては馴染みの地形なので、距離感が分かりやすく、もし落とされていたらという想像がつきやすいと思った。実際に、現地の学生が子供たちを案内した際には「この場所を知っている、ここまで被害が出るの！」という声があがったといい、自分事として捉えられる展示だと思った。
●「戦争で始まり、戦争で終わった学生生活だった。私は戦争少年だ。」講話をしてくださった松尾高林さんがおっしゃっていた。そんな彼が平和の原点で、平和を誓った瞬間であると語ったのは長崎において彼と同学年の生徒が着ていた国民服を見た時であった。「長崎に対して申し訳なさを感じる。」ご自身も空襲の被害にあわれたにもかかわらず、原爆が落とされるはずだった場所の人間として苦しみを感じられていた。このように原爆は落とされる可能性のあった場所の人々にも苦しみを感じさせる。
●今まで爆撃目標地がなぜ長崎だったのか知っている気でいたが、そこに至る経緯やその背景までを想像することはなかった。北九州の空襲から長崎原爆までの流れが自分の中で繋がった。
●原爆が落とされたのは広島と長崎ではあるけれど、それは他の県が何もなかったというわけではないということ。私達はもっと第二次世界大戦時に他の県や外国で起きた出来事についても学ばなければいけないなと思った。何事も広い知見をもたなければと改めて感じた。
●原爆投下第一目標であった小倉。しかし前日に空襲があったこと、風向きなどの複数の要因が重なり、長崎へと B29 は向かった。その事実があってか、北九州市長・松尾高林さん・ミュージアム館長の お話より、平和を願う気持ちの強さがとても感じられた。場所は違っても、平和を願う気持ちに変わりはない。今回のつながりを、これからも維持していければと思う。
●私たちは夢や希望を持ち、日々、学生生活を送ることができている。この日常は当たり前ではない。過去の沢山の犠牲を胸に留め、身の回りの小さな幸せに感謝して生活していきたい。

【2.「意見交換会」で話した内容】

これまで地域で受けてきた平和教育について	・北九州では小倉が原爆投下の第一目標であったことは触れずに、原爆に関して習う（今回の交流時に初めて知った！） ・高校から平和学習の機会が減るため、そこが課題でもある ・平和に関して興味がある人、授業だから受けている人、どちらもいる

	・戦争や原爆に対する意識は、長崎とその他の県では、 少し異なる部分もある。
ピースフォーラムの感想	・全国のたくさんの方々と繋がり、お話することができ、自身の視野がぐんと広がった。 ・たくさんのことを学ぶことができた。 これから、平和を伝えられる人になりたい。
平和活動に関して	・どうしても意識高い系、ハードル、敷居が高いと思われがち。 知人から「すごいね、偉いね」と言われることも。 ・フォーラムに参加してみてとても良かった。他の人にも 「こんなものがあるよ、こんなことができるよ」と伝えたい。 ・継承の早急性。より多く、他の人を巻き込むために、平和活動に 取り組む私たちが働きかけを行わなければならない。 ・そのほかのボランティア活動においても、飛び込んでみることが大切。 そこから新たなチャンスが生まれる。
将来とりくみたいこと	・長崎に進学しようと考えており、ピーボに入りたい！（北九州高校生） ・学芸員に興味がある。（平和への多種多様なアプローチの一つ） ・長崎で学んだことをもとに、神学を学びたい。 ・どんな道に進んでも、今回の繋がりを大切にしたい。
世界情勢が変わる昨今、 未来へ向けて考えること	・当たり前の日常を当たり前と思わないこと。 ・できるだけ早く、日常の素晴らしさに気づいてもらいたい。 （コロナ禍で気づいた人は遅いのでは） ・歴史を学ぶ重要性。歴史は点ではなく、線であること。 歴史はどこか遠いものではなく、今につながっている。

【3. 交流会を通して学んだこと・感じたこと】

●他の県の方の話を聞いて、やっぱり長崎は平和教育が充実していると感じた。 長崎の人だけが沢山勉強しているわけじゃない事も知れて、嬉しかった。 自分達世代がもっと平和について考えていくにはどうしたらいいのか意見を交わせてよかった。 また、体験講話を聞いて小倉から長崎に移った経緯が詳しく知れてよかった。 加えて、伝え方についても学べたと思う。
●特に話が盛り上がったのが、「長崎原爆の規模感が違いすぎることによる想像のし辛さ」という話題。 それについては長時間話すこととなった。 わかりやすいことと、恐ろしさを伝えることを両立できるよう今後努めなければならないと感じた。
●あっという間に時間が過ぎた意見交換だった。一番の収穫はフォーラム参加者から感想を聞くことが できたこと。とても良い経験であったこと、心境の変化があったことなどを聞くことができた。 フォーラム参加者から感想を書面でいただくことはあるが、時を超えて再会する機会はなかなかない。 平和学習に対する考えも人それぞれであること。 「平和の伝え方」を考えていかなければならないと感じた。

●長崎のように、すべての地域の学校で平和学習が行なわれているわけではなく、そのような中で、自ら戦争に関心を持ち、学習して、継承活動をするのは難しいことだと感じた。 長崎の原子爆弾の投下について、他の地域に住んでいる人は、その悲惨さをあまり知らないから、もっと伝えていく必要があると感じた。
●小さい頃から原爆などについて触れていかなければ、怖いイメージなどから積極的な学びをしようとはならないのだと知った。 だから、小学生の頃から長崎で学べてよかったと改めて思ったのと同時に、長崎や広島など出なくても、全国の子供達が小さい頃から少しでも戦争について学ぶ必要があると感じた。
●もっと県外に平和教育を広めるべきだと感じた。